



よし！
新しい
会社を
作ろう！

日本を
豊かにするために
紙だけでなく
世界と広く商売を
しましょう！

二代目社長 大倉文二

初代社長 大倉孫兵衛

大倉洋紙商行は、東京・日本橋の
大倉洋紙店が子会社として設立
した新しい貿易会社でした。

この会社で
私は
頑張るぞ！

1906(明治39)年6月、東亜同文書院を
卒業した24歳の邦彦は、中国で「大倉洋紙商行」
の天津出張所に就職しました。

1906年
24歳
大倉洋紙商行に就職

【第二章】社員教育から教育事業へ

もっと売上を
増やすぞ！

なんと邦彦は入社
2年目にして出張所長を
任されました。

所長

感謝您一直
以来的支持！
いつもありがとうございます
ございます

中国語もペラペラ
だし、見込みがある。
まだ若い邦彦くん
ならここを任せられ
そうだな。

邦彦は、真面目で責任感があり、物腰も柔らかく、
中国の商慣習にもくわしく、その目覚ましい働きぶりは、
すぐ上司の目に止まりました。

そこは
こうして
ください。

昔から
こうして
きたのに
な……

あんな若い者に指導され
なきやいけないなんて……

若くして支配人付となった邦彦は、
長年勤めている先輩社員たちの働きも
監督しなければなりません。

うーん、人を
指導するのは
難しい——
でも心を動かす
方法はきっと
あるはずだ。

8年ぶりの
日本だ。

所長として実績を上げた邦彦は、東京に呼び戻され、
親会社の大倉洋紙店で支配人付となりました。

1915(大正4)年当時の大倉洋紙店

1912年

30歳

大倉文二の養子となる

その頃、邦彦の勤める会社の社長の大倉文二は、50歳を目前にして大きな悩みがありました。

将来は社会貢献に力を注ぎたいが、私には息子がいない。会社のおと継ぎをどうしようか...



そこで白羽の矢を立てたのは、社内でメキメキと頭角を表してきた江原邦彦です。

そうだ！江原邦彦くんなら人望がある。会社を任せられそうだ。

よし！

彼に娘の富美と結婚してもらって、大倉家と会社の将来を託そう！



江原くん、私の娘と結婚して養子となりこの会社を継いでもらえないか。

えっ！私がですか！

邦彦はいろいろと悩んだ末、文二の養子となることを決めます。

私は次男だし、実家を継ぐ必要はないが、でも社長からこんな話をいただけるのは幸せなことだ。

この話、受けることにしよう！

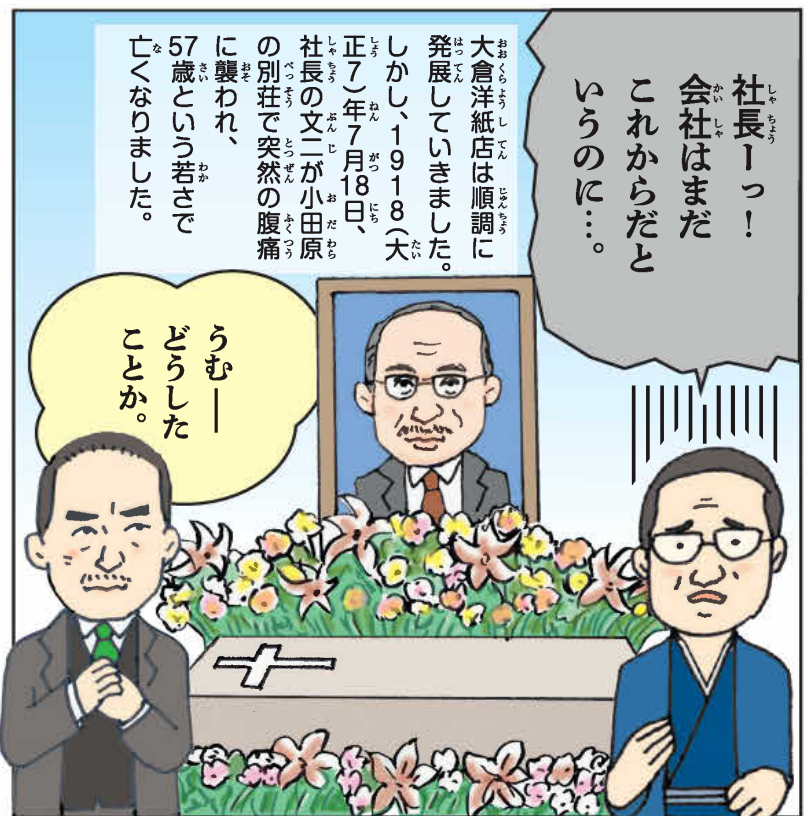
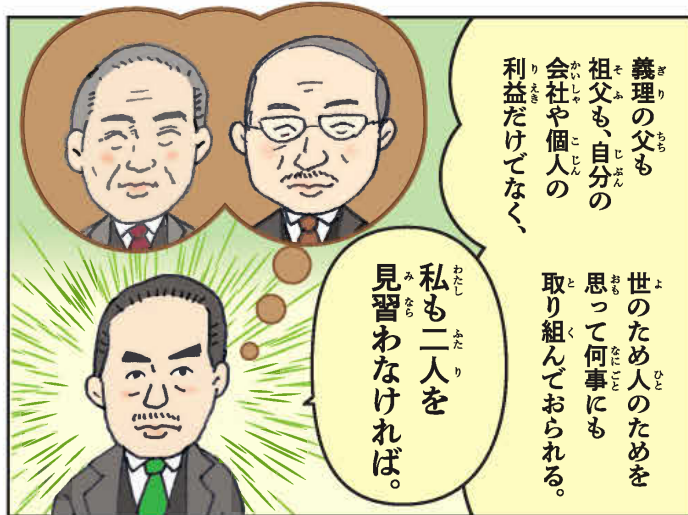


邦彦は文二の長女富美と結婚し、大倉洋紙店の総監督として文二社長を助け、大文洋行（かつての大倉洋紙商行）の支配人にもなりました。

邦彦くんに任せるよ！

はい！頑張ります。





義父は素晴らしい人だった——
その考えを大切にしていこう。
社員のみんなは、若い私が社長になって不安かも知れない。まずは社員のみんなに私の思いを知ってもらおう。



邦彦は、文二が商売のあり方をまとめた「大倉洋紙店綱領」や、当時の少なくなかった、十代前半の社員たちが理解できるよう、



そして、言葉遣い・挨拶・礼儀作法からお客様に接する時の態度・仕事上の注意などを、細かく愛情に満ちた言葉で語りかけて、社員に指導しました。

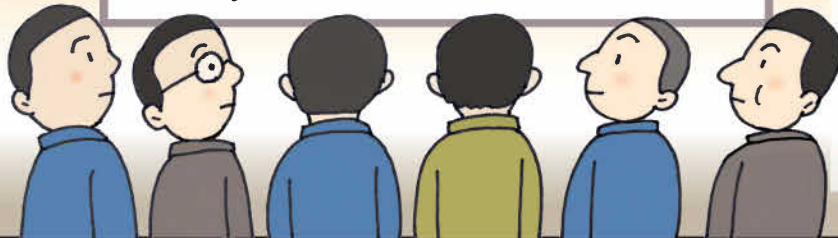
まずお客様のことを第一に考えるんだ。
自分の儲けばかり考えてはいけないよ。



邦彦は、毎月一回、日を決め、マニュアルを基に、さまざまな逸話や、例え話を交えて、自ら社員教育をしました。

- 一、商売は儲けることであるが、それを一番に考えない。
- 二、人の道を第一に。
- 三、嘘はつかない。
- 四、駆け引きをしない。
- 五、誤魔化しをしない。

私は人として大切なことを教えていきたい。



若い社員に対しては夜学に通って勉強することを薦めました。

若いうちに大いに勉強しなさい。

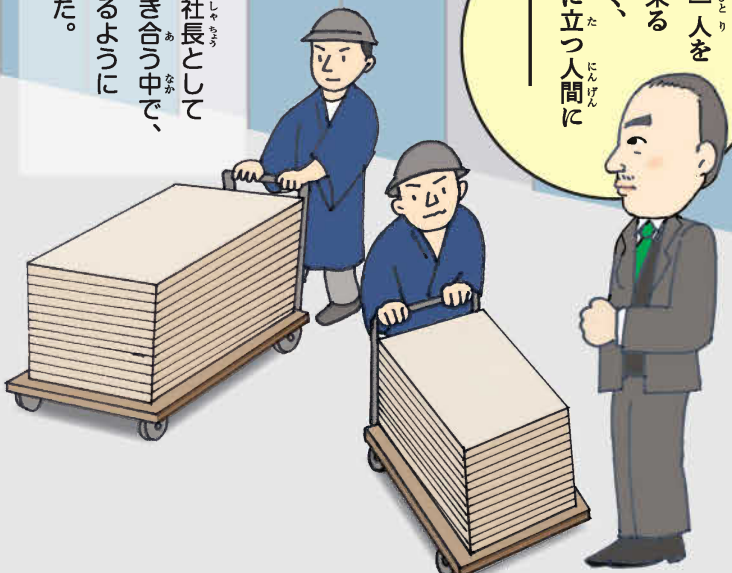


はい！社長！



社員一人一人を仕事ができるだけでなく、社会の役に立つ人間に育てたい——

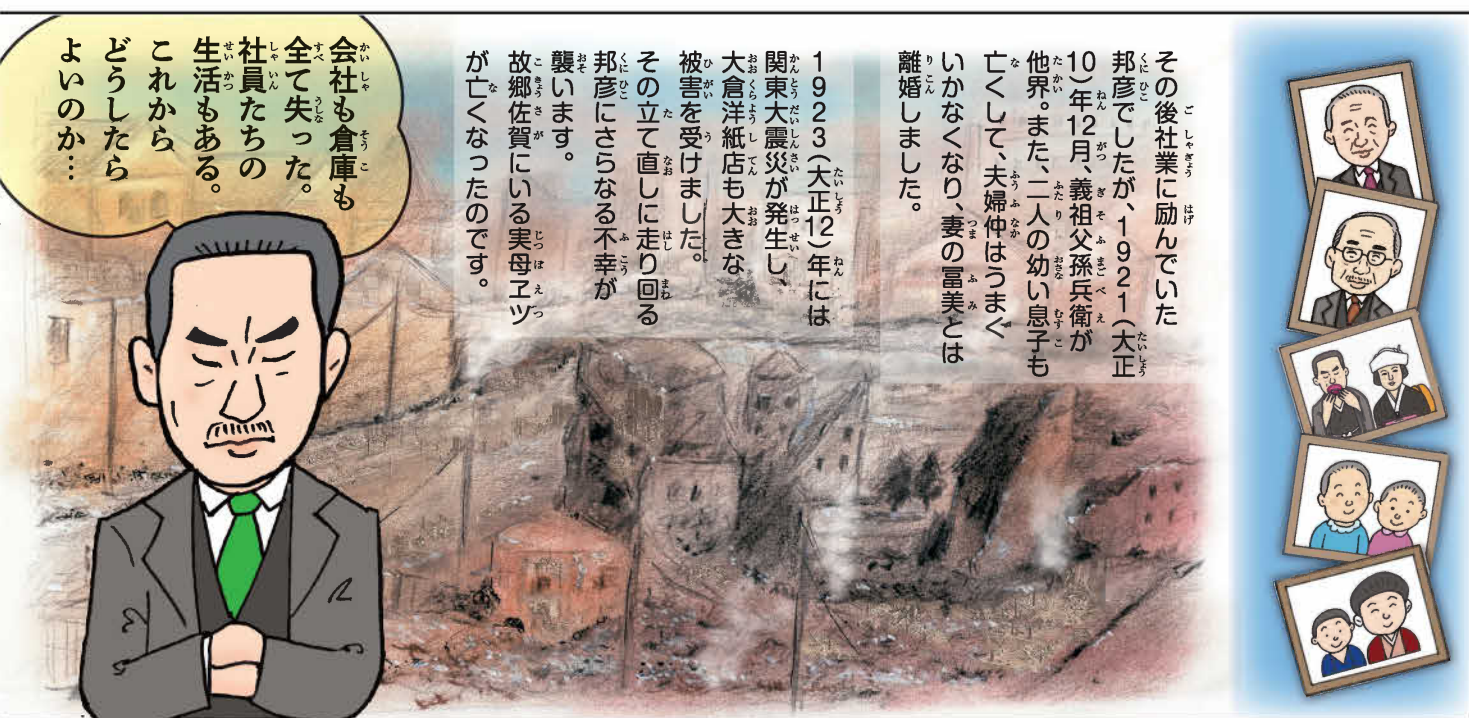
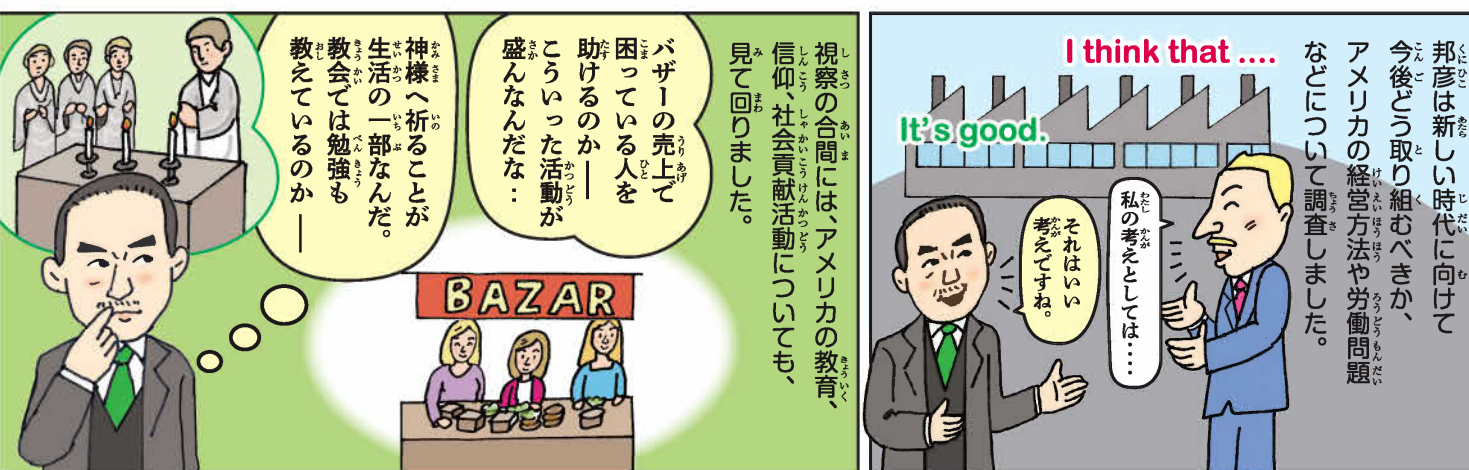
邦彦は、社長として社員に向き合う中で、そう感じるようになりました。

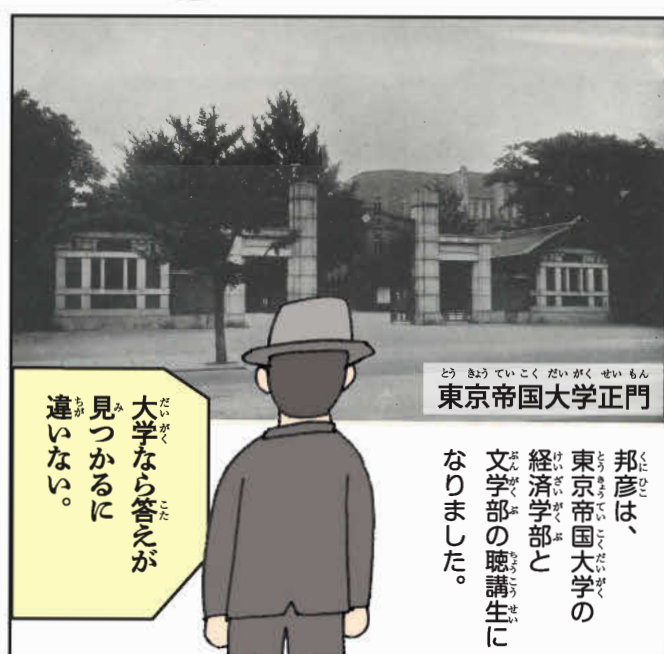
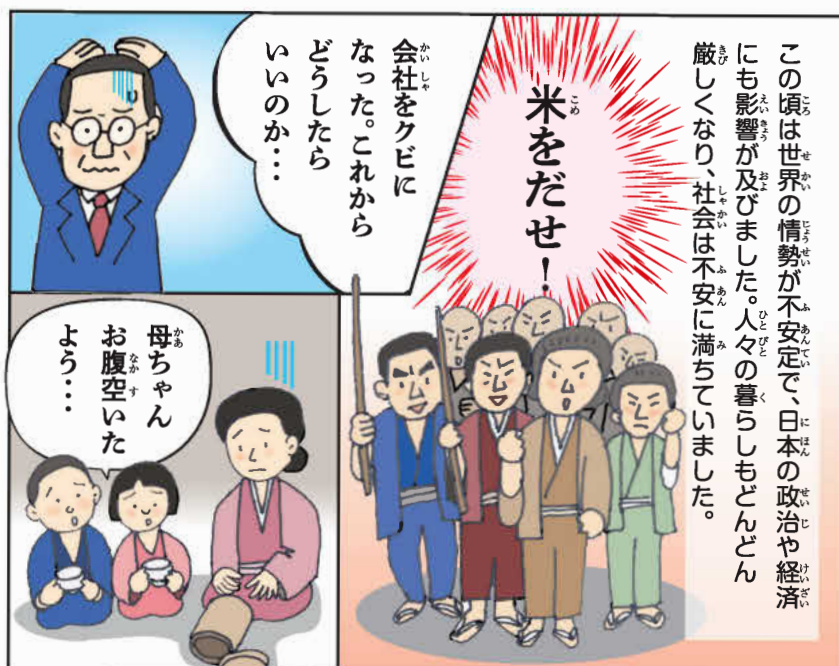
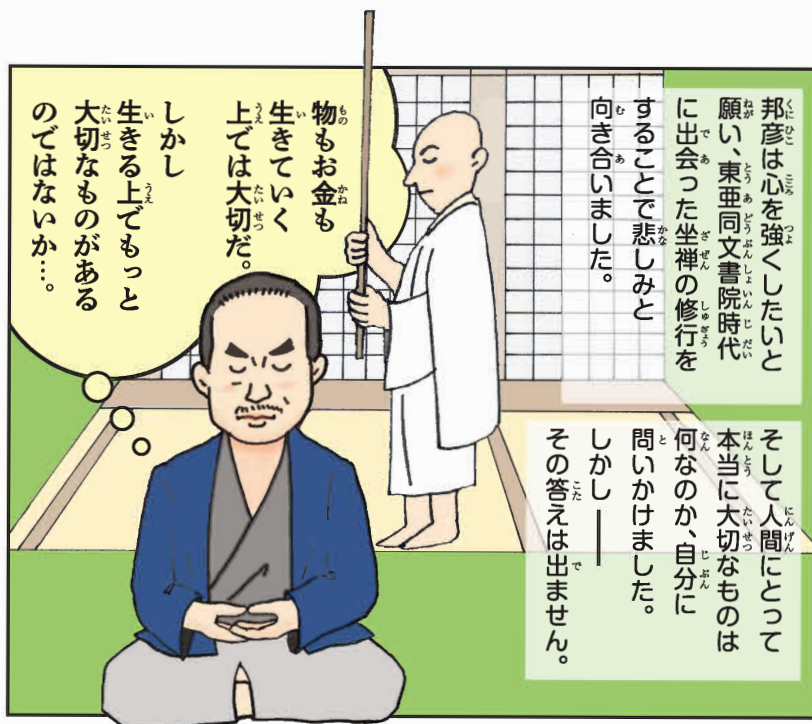


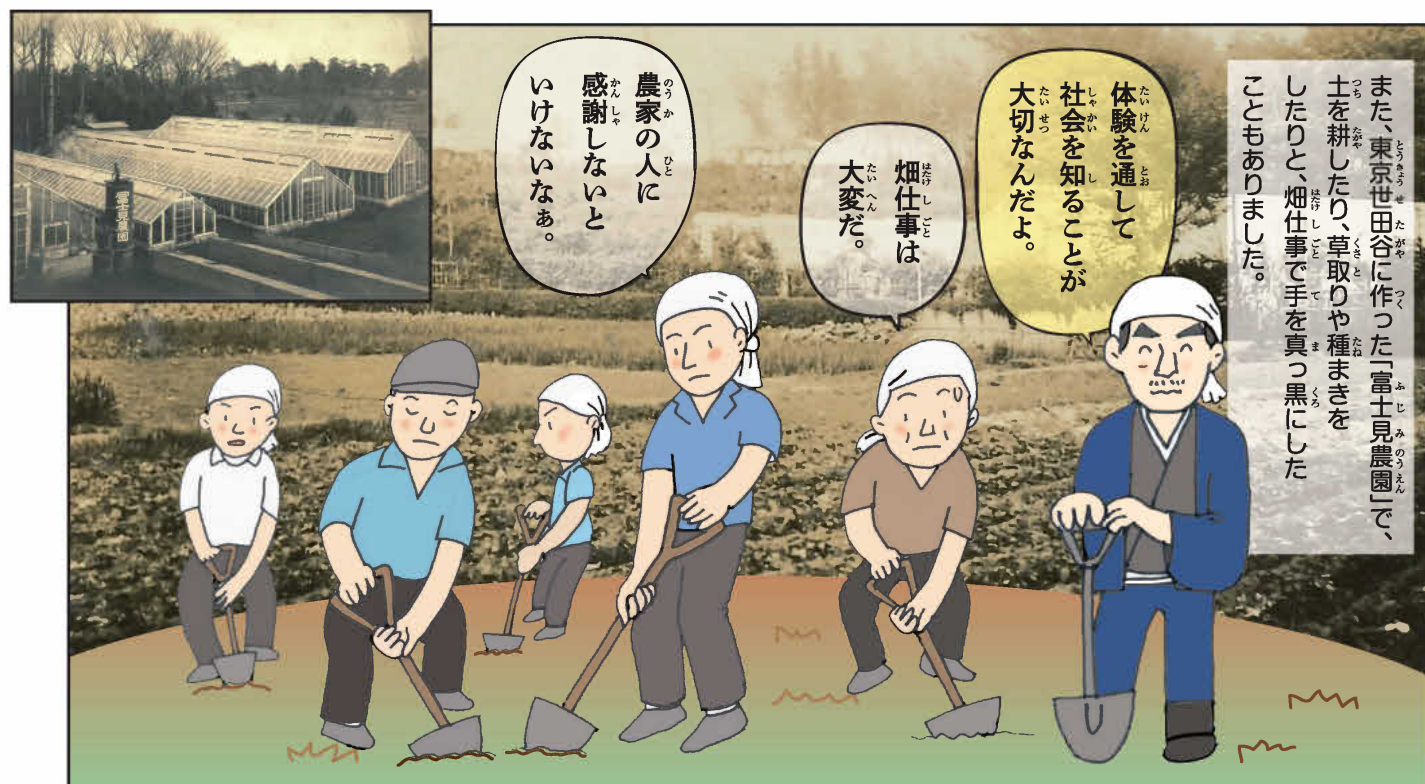
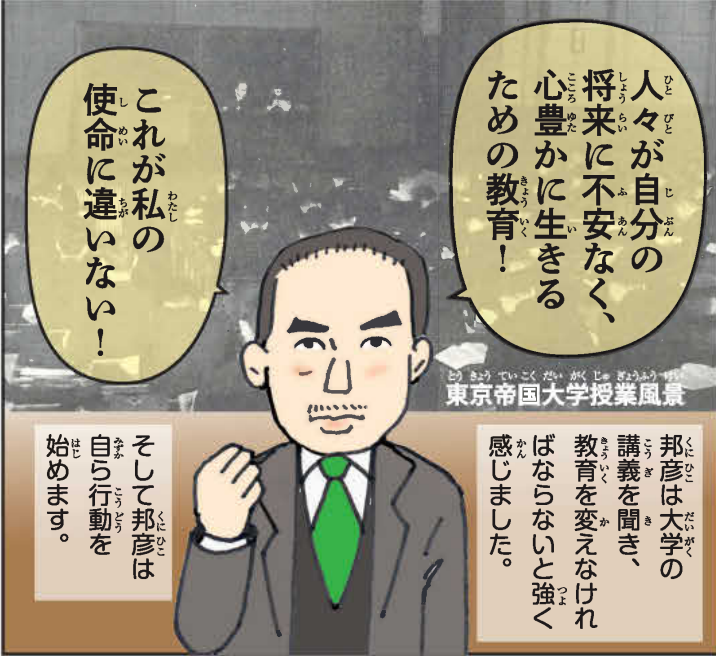
1920年

38歳

アメリカ視察







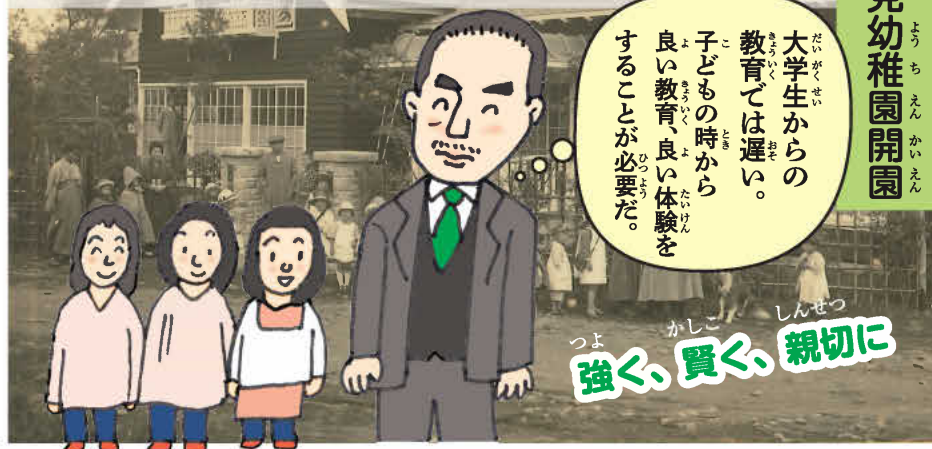


邦彦は学生と関わる中で、幼い時の体験や教育が、人間の基礎をつくる最も重要なものであると考えました。

そこで、幼児教育が今ほど重要視されていなかった時代に、東京の中目黒に「富士見幼稚園」を開園します。

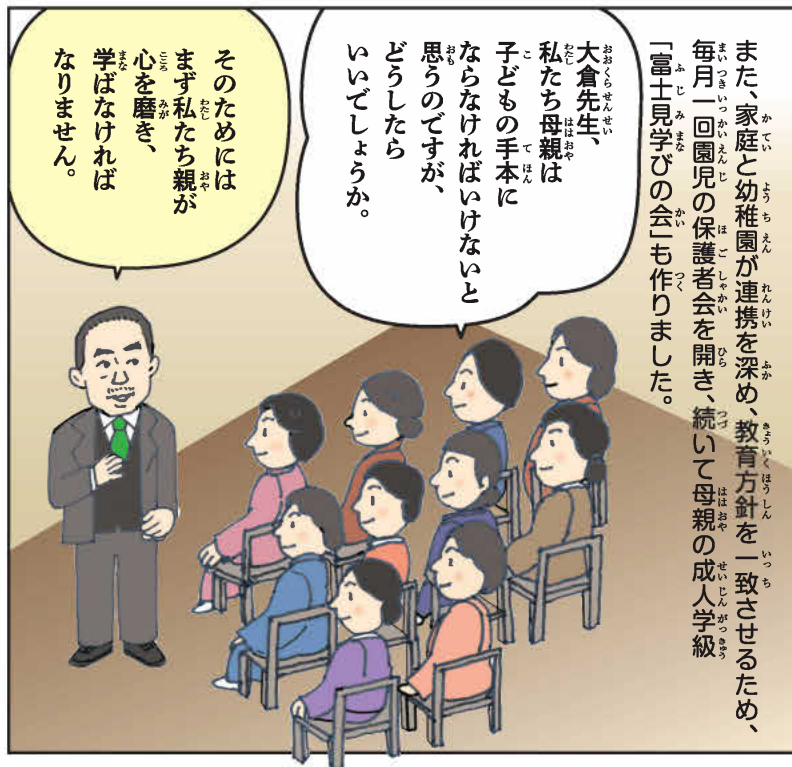
大学生からの教育では遅い。子どもの時から良い教育、良い体験をすることが必要だ。

強く、賢く、親切に

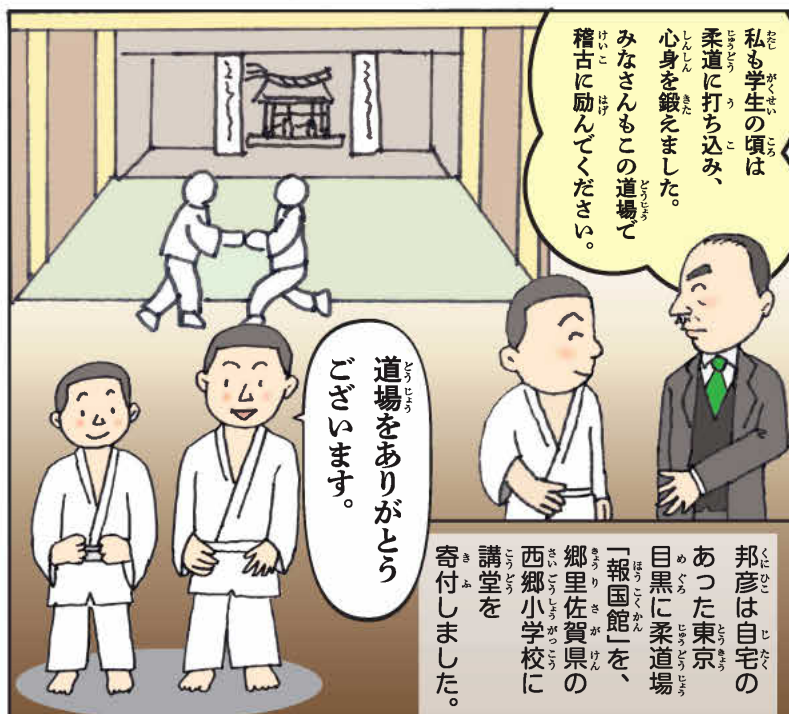


その後、幼稚園の卒園生のために「富士見日曜学校」も開きました。先生は邦彦や学生たちで、

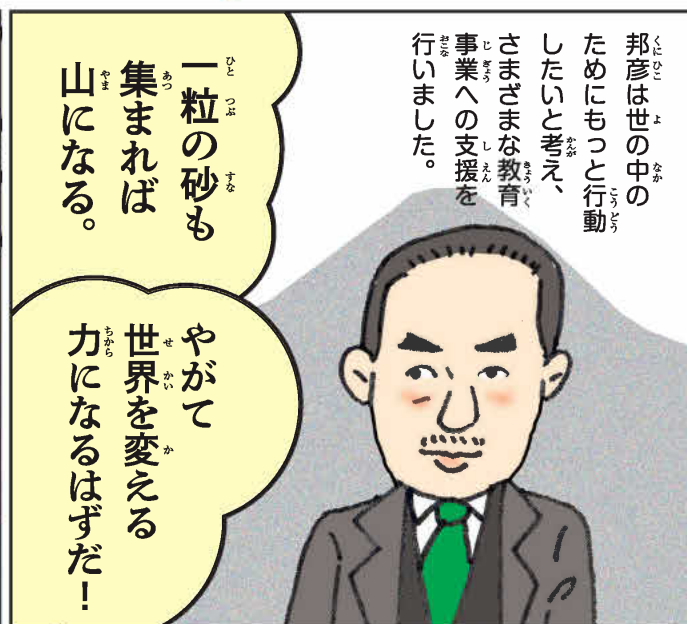
知識だけでなく、子どもたちと一緒に考え、行動し、さまざまな体験を通して学ぶ教育を実践しました。



また、家庭と幼稚園が連携を深め、教育方針を一致させるため、毎月一回園児の保護者会を開き、続いて母親の成人学級「富士見学びの会」も作りしました。



邦彦は自宅のあった東京目黒に柔道場「報国館」を、郷里佐賀県の西郷小学校に講堂を寄付しました。



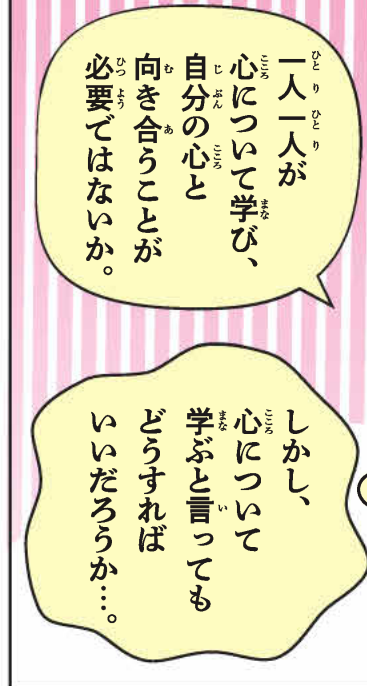
やがて世界を変える力になるはずだ！

邦彦は世の中のためにもっと行動したいと考え、さまざまな教育事業への支援を行いました。

邦彦は社会や人生、仕事などについて
日々思いついたことをメモしていました
それを二冊にまとめて『感想』と名付けました。



邦彦は『感想』への
反響の大きさに、
多くの人たちが
自分と同じように
悩み考えていると
感じました。



そうだ！
お金がなくても
自由に心について
学べる環境を
作ろう！



早速邦彦は専門家に相談しました。

図書館にどんな
本を置いたらいいか、
考えて頂きたいのです。



さらに邦彦は、
教育が社会の役に
立たないものに
なってしまった
理由は、教育者の
多くが教育を
お金を稼ぐための
手段としか思っ
ていないからだ
と考えました。



